

# 2012 年度事業報告書

2012 年 4 月 1 日から平成 2013 年 3 月 31 日まで

NGO ダイバーシティとやま

日本社会は、1950 年代の高度成長期以降、様々な分野において先達の技術や技能が発揮され、未曾有の経済成長を果たし、安定的な社会システムの中、大量生産・大量消費という豊かな社会を実現しました。しかしながら、その後の 1990 年初頭のバブル経済の破綻や 2008 年の世界的な金融危機を受け、効率化やグローバル化、規制緩和など過度の自由主義の推進、さらに人口減少社会を迎えた今、さまざまな課題が現前する結果となってきています。

2011 年、私たちは未来志向のアドボカシーともいえるドリームプランプレゼンテーションをきっかけとして、NGO ダイバーシティとやまを設立し、以後、普及啓発を中心としながらも、地域に根差した活動をめざし、顔の見える関係の構築に努め、多様な事業に傾注してまいりました。学びを深める座学型の講座から、対話型のワークショップ、フィールドに出かけての体験型の野外活動まで、さまざまな形態での事業を展開してまいりました。

また、日常的な情報発信として、新聞での連載記事やインターネットによる活動報告を継続的に配信し、ダイバーシティの理念の紹介や身近な存在の多様性の紹介に努めてきたところです。

さらに、企業との連携を視野に協働事業を実施し、また、マッチング事業への参画を行ってきましたが、ダイバーシティがスタンダードとなる成熟した社会に至るには、まだまだ途上の段階であることも整理されてきました。

こうしたことから、引き続き、しなやかな地域社会の創造に向けた提言や普及啓発活動を行うとともに、新たに、地域の課題を解決するアプローチやネットワークの形成といった課題に取組み、これまでの成果を活かした多分野団体との連携など、今後、ますますの NGO ダイバーシティとやまの活動の充実や、多様な主体による多面的連携に努めることが重要となってきています。

# 1. "ちがい"に気づく事業

## 1. 「NGO ダイバーシティとやま設立1周年記念フォーラム」開催事業

【実施日】2012年11月25日

【共催】一般財団法人ダイバーシティ研究所

団体設立1周年となるフォーラムとして、2名の講師をお招きして基調講演を行いました。ダイバーシティの基軸となる視点をしっかりと見据えたお話をいただきました。

このフォーラムは、「ダイバーシティ・サポーター養成講座」の併催形式として開催しましたが、数多くの方々の参加者の中には、未来の国会議員[当選]、未来の県会議員[当選]、未来の市長[当選]もいらっしゃいました。(参加予定の現役国会議員の方は当日所用でご欠席でした)

### (1) 「ダイバーシティなくして地域社会の未来なし」

【講師】田村 太郎(一般財団法人ダイバーシティ研究所 代表理事)

田村さんからは、現在、日本や世界は人口変動社会を迎え、労働者人口の減少に直面していることから、これまでの社会保障制度や経済の仕組みが維持できなくなると予測され、地域社会の衰退を回避するためには、これまで必ずしも十分に活用されてこなかった人材ともいえる女性や障害者、外国人といった様々な個性を活かしていくための社会づくり、すなわち、ダイバーシティに配慮した社会づくりが必要であるとの話をいただきました。



2010年に発行されたISO26000では、持続可能な社会のための国際ルールとしてのガイドラインが示され、これを遵守していくことが、今後の地域社会を作っていくベースになるということです。ISO26000では、あらゆる主体が社会的責任(SR)を果たすことを必要とされるが、これはサプライチェーンにより、大企業のみならず、地域の中小企業にも求められることになるということです。そして、ISO26000が課題としているキーワードのほとんどがダイバーシティの視点から読み解くことができるものであるとのこと。ふむふむ、みんなが誠実になっていくということですね！

このために、社会的マイノリティはもちろん、マジョリティも含めた社会全体で、多様な担い手が多様な働き方・生き方が実現できるよう社会全体を変えていく必要があるとのことでした。

### (2) 「見方を味方に世界を変える」

【講師】南野 忠晴(大阪府立八尾北広報学校 家庭科教諭)

南野さんからは、学校教育の現場から、単に正解を求めるだけでは人間を育ててい

くのは困難であり、生活力の向上が人間力を高めていくことだとの話をいただきました。

南野先生は、多くの教科では、テストなどを通じて、不正解をなくしていく努力が行われ、大多数と同じ考え方をしていくためのトレーニングがなされているのではないかとの疑問を持ったとのこと。こうしたとき、「パンツの正しいたたみ方」に悩む男性教員に出会います。パンツのたたみ方には正解はないし、人それぞれの価値観やこれまでの生き方から導き出されたものであって、正解がない以上は、これは話し合っただけで多様な価値観を認め合うしかない気付いたとのこと。さらに、家事や洗濯は奥さん任せといった依存や支配の関係ではなく、互いの生活力を向上させ、互いに自立していくことが、真の共生関係を築いていくのではないかとのこと。自分自身の生活の中にダイバーシティを推進させる活路があったなんて！難問氷解です！



こうして、多様な存在が、多様な生き方を実践し、ロールモデルとなっていくことで、自分自身が多様な存在の一部であり、自分の中の多様性を実現していくことになるとのことでした。とても味わい深く琴線に触れるお話でした。

講演の最後には、「天国での回想」として、ステキなお話もありましたが、あまりにステキなので、この話は南野さんから直接、お聞きくださいませ。

## 2. 「世界自閉症啓発デー世界遺産五箇山菅沼合掌造り集落ブルーライトアップ&ワークショップ」開催事業

【実施日】2011年4月2日

【共催】越中五箇山菅沼集落保存顕彰会

【協賛】四季の五箇山実行委員会／南砺ユネスコ協会

【後援】富山県／南砺市／富山県自閉症協会

【協力団体】元気だそうぜ！富山福祉ネットワーク／任意団体ひとのま／ヤマシナ印刷(株)／I LOVE 南砺

世界自閉症啓発デーには、自閉症応援の光のリレーとして、ニューヨークのエンパイアステートビルやカナダのナイアガラの滝など、世界48ヶ国2,000ヶ所以上がブルーにライトアップされます。ダイバーシティとやまでは、この日にあわせ、世界遺産五箇山菅沼合掌造り集落をブルーの光でライトアップ、そして自閉症の理解を深めるワークショップを開催しました。

当日は、天候にも恵まれ、群青の空とブルーにライトアップされた合掌造り集落の美しさに、みな息を呑みました。ワークショップ会場の吾郎平さんの前には、ダイバーシティとやまの竹灯籠、そして玄関には入りきらないくらいのたくさんの靴が並びました。

ワークショップには、自閉症支援施設めひの野園うさか寮施設長の東真盛さんを講師に迎え、なんと50名を超える方が参加されました。そして、その多くは今まで自

閉症のことをまったく知らなかった方たち。「自分に真っ正直な自閉症の方々が大好きだ」と語る東さんの温かいお話に真剣に耳を傾け、新たな気づきを得たとお言葉などたくさんいただきました。また、会場では、自閉症の方の素晴らしい作品も紹介。何点もの作品をお持ちいただき、みなさんその筆運びに感心しきりでした。

今回、約1ヶ月足らずの準備期間の中、大成功の開催となったのは、本当にたくさんの方のご協力あっての賜物でした。短期間に、こんなにたくさんの方とつながり、このイベントを盛り上げられたことに心から感謝しています。そして、東さんが最後に示してくださった「ひとりで見る夢は、ただの夢。だけど、みんなで見る夢は現実になる」。参加者全員で、それを実感できた一日になったと思います。



### 3. 「外国人住民サポート防災研修」協力事業

【実施日】2012年7月7日・21日

【主催】富山県

【協力】NGO ダイバーシティとやま／(特活)多文化共生マネージャー全国協議会／日伯交流友の会

前年度3月に開催した「災害時だからダイバーシティ」では、災害時にこそダイバーシティを考えるヒント・学びがあるという講演&ワークショップを開催しました。

このときに、災害時に備え、在住外国人の人も交えた災害時研修や防災訓練を実施してはどうかとの意見もあり、当団体としても実施に向けて検討してまいりましたが、富山県国際・日本海政策課主催の災害時の外国人支援についての研修会「外国人住民サポート防災研修」の企画を知り、ダイバーシティとやまも協力させていただくことになりました。

研修は2回に分けての実施となり、1回目の7月7日には防災研修として、災害が起きたときに外国人住民はどのような状況に遭うのか、外国人支援はどのように行われる(た)のかについて、2007年の新潟中越沖地震や2011年の東日本大震災時に実際に支援活動に従事した「NPO 法人多文化共生マネージャー全国協議会」副代表の高木さんにレクチャーいただきました。



午後からは、4月に新しくオープンした県消防防災センターの最新の設備で地震体験や消火訓練、暗い室内での煙からの脱出など防災体験が行われました。

2回目の7月21日には、実際の震災時の外国人支援活動をそのまま研修の教材として、どのように災害情報を外国人に伝達すればよいのかを学びました。

当日は、富山国際学院の留学生や日伯交流友の会が関係する在住外国人など、多くの外国人の方に参加いただきましたが、実際に災害情報を翻訳する難しさを実感しました。日本人にとっても災害時の情報は難解な単語が数多く頻出するため、日本人によるやさしい日本語への翻訳も行いましたが、苦悩する日本人も多々でした。(^^;)

多くの学びがあり、災害時に対応していくためにも、しっかりとダイバーシティへの視点を伝えていく必要性を再認識いたしました。



#### 4. 「多文化共生講演会 2012」協力事業

【実施日】2012年12月15日・23日

【主催】富山県

【協力】NGO ダイバーシティとやま

##### (1) 「姜尚中とともに考える多文化共生」 [12月15日]

【講師】姜 尚中(東京大学大学院情報学環教授 現代韓国研究センター長)

2012年12月15日、ここ富山で新しい多文化共生の地平が切り拓かれました。約500名の来場者とともに新しい時代の胎動を感じる素晴らしい講演会となりました。

姜さんからは、穏やかでいて、凜としたお話をいただきました。

まず、講演の前半にひとつのキーワードが提示されます。司馬遼太郎さんが書かれたという「落地生根落葉帰根」。ひとつの命が大地に根差して生き、そしてまた大地に帰るということ。生きとし生けるものの「さま」として、また、命のダイナミズム、移動する生物の常なる姿として、提示されました。

姜さんは、帰化植物の喩えを交えつつ、軽妙な語り口で、会場に笑いを起こすとともに、ご自身の体験から、ひとつの命が国境を越えて、生きていくさまを話されます。

私たちの世界の国境または、近代国家の“クニ”という概念は、わずか100~200年ほどの歴史の検証しか経ていないこと。それ以前は、もっと別の自身の生まれや育ちなどの概念に依拠していたものであること。それはすなわち、地域社会であり、地域の文化であり、食であり、酒であり、伝統工芸であり、祭りなど生きた文化、人との交流であるということ。こうした地域に住む人間は、その地域内にしか存在しない文脈(コンテクスト)を持っているということです。同じ文脈の中で生きているので、多くを語らなくても意思疎通ができる。そうした心地良さの中に生きているということです。また別の言い方をすると、他の地域からみると、翻訳が必要な世界に生きているということになりますね。

数十年前には、日本の大学にはいろんな考え方、いろんな地域文化を背景に持っている学生が混在していた。いろいろな背景、文脈を持つ学生たちが混在することで、切磋琢磨し、互いを理解しようとする中で、素晴らしい人材を輩出してきた。近年の学生を見ていると、その学生の親を含めて、極めて均質化してきているように見受けられる。例えば、東京大学の学生は、人口10万人以上の都市出身で、両親が四大卒の学生が大多数ではないか。異質な文化背景を持った学生が交流することが難しくなっている。縦の時系列でみると、若いときに異なる文化と出会う機会が著しく減っており、この影響かどうかは断じ得ないが、海外に留学しよう、異なる文化を享受しようという気概も減じてきているように感じられる。

こうした文脈のちがいは、なにも難しいものではなく、“男女”のことを考えると理解しやすいと思う。ほんの数十年前には、「女性は学問を修めなくてもよい」という風潮や考え方もあったと思うが、今ではそんなことは、まったくなくなっている。

むしろ、女性を積極的に登用していくことが企業や社会に活力を与える必須のことになっている。(ここで某大手企業の女性登用の少なさについて、会場の笑いを誘う姜さんの体験談もありました。)

異なる人・背景・文化との交流が人を成長させていく原動力ともなる。

私たちは、わずか100~200年の間に“クニ”というものを作り上げたが、同じ文脈に生きることに慣れ過ぎている。“クニ”というものは、果たして完成したものだろうか。私たちは、その“クニ”ができるまでは、様々な地域との軋轢や衝突を経験したはずである。(たとえば、現在に生きる人の中に脈々と生きていた明治維新期の話をいただきました。)

日本に生まれ、日本語を自由に操り、日本社会で当たり前のことを当たり前のよう感じて生きているということは、ひとつの結果であり、日本社会が培ってきたもの、すなわち、私たちが日本社会のプロだという言い方も可能だろう。小学生の時から、文字を学び、歴史を学び、文化を学び、日本社会に生きる努力をし、トレーニングをしているからこそ、日本社会のプロになっているといえるのではないか。(姜さんは姜さんの母親の姿を見て、これを強く実感し、その姿に感動されたそうです。)

ニューカマーと呼ばれる昨今の在住外国人に目を向けてみるとどうだろう。在住外国人は、日本社会においては、あるいは日本の文脈においては、プロという概念に照らしてみると、いわば学習途上のアマチュアともいえるのではないだろうか?日本に移り住み、もしくは日本に根付いて生きていこうとしている過程は、日本社会の文脈を学ぼうとしている、プロになろうとしているアマチュアに、その姿を重ねることはできはしないだろうか。

プロはプロとして向上していこうとする。しかし、ときにあまりに自明の文脈の中で生きているため、忘れてしまうことがある。



その忘れてしまうことは何か。幼い頃から日本社会で生きていくために学んできた小学校のこと、中学校のこと、文字を書いたり読んだりすること、部活動であったり、他の地域文化との出会いと学び、すなわち生きていくための学びを実践していくということ。

プロはこうしたことを忘れてしまいがちだが、アマチュア、すなわち日本社会での学習途上にある外国人に出会うことで、学ぶことの大切さを思い出すことができる。アマチュアはアマチュアとして努力しなくてはならないかもしれない。しかし、プロはアマチュアと対峙することで、自らが、まだ、「途上の人」として学び続けなければならないことに気づくだろう。そして学ぶことを思い出すきっかけともなるだろう。大切なのは「気づき」を得ていくこと。

「途上の人」、人生の途上であるということは、すなわち「青春」であるともいえる。70歳、80歳の人とインタビューする機会もあったが、若々しくみな口をそろえて「まだまだこれから」と青春を生きている人のように言われるのが印象的だった。

同じように、私たちが多文化共生を考えると、それは青春の学びであり、「途上の人」という自覚であり、これから成熟していく過程であると捉えることが大切だろうということです。

講演会のあとには、「日曜美術館」での名コンビ再会となるNHK富山放送局の中條誠子さんとの対話となりました。ここでは、フィールドのスポットを富山にあててのお話となりました。

中條さんからは、富山に住む外国人からコメントとして、富山での生活や意見、富山の住みよさなどのご紹介があり、これに対して姜さんからの感想もいただきました。世界における多民族多文化の国家の状態と比較して、日本社会は多文化の受入に寛容ではないか、懐が深い多文化を許容する世界のどの国とも異なるポテンシャルがあるのではないかと、とのことでした。

続いて、同じく外国人からのコメントとして、私たちが忘れつつある富山の住みよさについて、外国人からの声のご紹介もありました。

最後に、姜さんは、数十年後を見据えた場合、歴史的背景や地政学的にも富山の立地は今後、環日本海の拠点となりうるだろうとのご意見でした。ダイバーシティ・多文化共生の拠点として、頑張っていきたいものです。

会場からの感想はとてたくさんありましたが、姜さんの講演はもちろん、中條さんが富山のこと、富山の自然や生活に視点を置いて対談して下さったおかげで、姜さんのお話もよく理解でき、多文化共生が富山の未来の扉なのだと思います、富山から発信しなくては！との感想もありました。中條さんにも感謝の言葉がございません！！！！

姜さん、中條さん、本当にありがとうございました。

主催の富山県国際・日本海政策課のみなさまには、今回の講演会開催に際して、ダイバーシティとやまを協力団体として下さったこと、有形無形のアドバイス、ご支援、とてとても尽力いただきましたこと、感謝申し上げます。

あわせてダイバーシティとやま会員のみなさま、ドリプラーなみなさまのご協力あつての賜物でした！大感謝！

舞台裏のことですが、姜さんは、講演前に、私にこう語ってくださいました。  
「私たちは自己のうちに多様性を見出さなくてはならない。」と。  
すなわち、ダイバーシティです。

## (2)「違いを楽しみ、力に変える～多文化共生“新”時代～」 [12月23日]

【講師】にしゃんた(羽衣国際大学准教授)

絶妙の関西弁を操るスリランカ出身のにしゃんたさん。観客のみなさんは、あっという間に「にしゃんたワールド」へ。まずは、スリランカと日本のちがいを。

「わかりました」という意思表示は、日本では首を縦に頷くけれど、スリランカでは首を横に振る感じで8の字を書くんですよーと、笑いを取りながら日本の常識が世界の常識ではないということを語られました。

話の中心になったのは、ダイバーシティとやまではお馴染みの図。

ただ、にしゃんたさん流の解説では、「共生」ではなく「共笑」とのこと。ただ「共生」というと、それは、「同化」したり「棲み分け」したりすることも入ってくるのではないかと、共に笑い合える関係、それこそが大事だと力強く伝えられました。



そして、もともと日本人はちがいを力に変える力に変える能力に長けているのではないかとのこと。

例として出されたのが、「七福神」でした。七福神は日本の神様だと思っている日本人も多いけれど、七福神の中で純粋に日本由来の神様は恵比寿さまだけです、残りは中国かインドの神様、そして障がいをお持ちの神様もいらっしゃる、と。

古来日本人は、外国人や障がい者をちゃんと受け入れていた。つまりダイバーシティ社会だったのです！

次の例として、「毛利元就の3本の矢」の紹介。ホントにスリランカ人？

それはさておき、テレビ番組の実験で、3本の矢は本当に折れないのか、という実験をしていたそうです。その結果は・・・

見事折れましたー！

ええっ？それじゃあ話が續かないじゃないと、思ってしまいますが、さにあらず。3本束ねるだけでなく、もっとたくさんちがいを束ねていくことで強くなり、しなやかになる。ちがいが増えるということは、しなやかさ、美しさ、豊かさ、そういうものが増えるということなのです。

そして、更に話が続きます。

私たちには、心の壁、制度の壁、言葉の壁という3つの壁があります。心の壁は、思い込み、偏見、決めつけ、過信、無関心を指します。制度の壁は、法令や行政サービスでの適用条件のちがいを。言葉の壁は、そのままですよね。まず大事な壁があ

ることに気づくこと。気づかなければ何も始まりません。ここでもいろいろな事例をユーモアを交えながら話して下さったのですが、特にご自分が福井県出身の奥様と結婚するときに、奥様のご両親に反対された時のお話が印象的でした。

奥様のご両親は、お墓、国籍、孫、この3つの壁で国際結婚に大反対でした。まず、お墓。にしゃんたさんは長男なのに、スリランカのお墓を守らなくていいのかと、そうおっしゃるのです。スリランカも仏教の国ですが、墓守をしるとはお釈迦様もおっしゃっていません。それが日本では長男は墓守をしなければならないということになってしまった。1つ目の壁です。次に国籍の壁。その時、にしゃんたさんはもう日本国籍を取得していたのですが、奥様のご両親からすると、簡単に自分の国を捨てるような人は信用できないというのです。そして孫の壁。孫の肌の色がちがうと困る！というわけです。

やがて、ご両親にもにしゃんたさんの人柄が伝わり、二人は結婚を許されることになりました。二人の結婚を許された日に奥様のお母様からもらった手紙を今でもにしゃんたさんは大切に持ち歩いておられるそうです。

「にしゃんたさん、私はあなたのことを誤解していました。あなたは本当に心の優しい素晴らしい方です」と、そうしたことが書いてありました。まさしく壁がなくなったのです。今では、にしゃんたさんは奥様のお母さまと大の仲良しとのこと。

お子さんも生まれたわけですが、今は国際結婚のカップルの子どもはハーフではなく、ダブルという言い方をするようになりました。

見方をプラスに変えていくこと。それが大事です。

ちがいを力に変えること、それは日本人のお家芸なのです。シロアリを退治した時に、シロアリにまでお経を上げる日本人。シロアリにまで思いを馳せられる日本人にとって、多文化共生は難しいことではないのにしゃんたさんはおっしゃいました。

まさしく、ちがいを楽しみ、それを力に変えることが大切だと感じたにしゃんたさんの講演会となりました。

そして、この講演会のあと、ダイバーシティとやま主催でのワールドカフェで参加者が、「外国人にも日本人にも暮らしやすい地域づくり」について対話を深めました。

## 5. 「ダイバーシティ・サポーター認定」事業

ダイバーシティの普及啓発や実践者の増加を図るため、1日1回、ダイバーシティ・アクションを起こすダイバーシティ・サポーターを募集し、認定証を発行しています。

ダイバーシティ・アクションとは、一人一人のちがいを大切に、活かしていくための行動のこと。いろんな人がいて、いろんな人と話した方が楽しい。むずかしいことは何もなく、自分にあるちがいを見つめ、相手のちがいを認め、行動してみよう。日常的な何気ないひとコマが輝きはじめ、ダイバーシティ・アクションの連続になるはず。

自分の価値観と「ちがうぞ」って、拒まない。きっと、ちがいがあることで、いろんな発見ができる。そして、そこから新しいワクワクが始まるのです。

## 6. 「ダイバーシティ普及啓発」事業

### ○研修・講演受託・執筆事業

ダイバーシティの理念や基本的な考え方、事例紹介などの普及啓発のため、依頼に基づき、講師の派遣、研修会の受託、原稿の執筆などを受けました。

2012年度の受託実績は次のとおりです。

- ・第300回記念富山市倫理法人会経営者モーニングセミナー[2012. 5. 31]
- ・金沢ドリームプランプレゼンテーション[2012. 6. 3]
- ・富山国際大学[2012. 11. 7]
- ・富山県立総合衛生学院[2012. 12. 20]
- ・北陸中日新聞連載記事「NPO 通信」[2012. 3. 27～2012. 6. 12]



### ○ウェブサイト「ダイバーシティとやま」運営事業

ダイバーシティとやま主催の行事の広報や、事業実施結果等について、インターネット上で情報提供に努めました。

ウェブサイトでは実施事業の案内のほか、関連団体の主催事業、会員やダイバーシティ・サポーターの募集などについても広報を実施しました。

(URL: <http://diversity-toyama.org/>)

また、SNS (facebook) を活用したタイムリーな情報提供にも努め、毎回たくさんの方々の「いいね」やコメントをいただきました。



### ○普及啓発用パンフレット作成配布事業

紙媒体の広報としてチラシを作成し、ダイバーシティとやま主催事業での配布のほか、参加イベント等の機会を通じ、幅広く広報を実施しました。

## II. "ちがい"を活かす事業

### 1. 「できることもちよりワークショップ」開催事業

【実施日】2013年2月23日

今回のワークショップは、勉強会という位置づけで、オープン参加の呼びかけは行わない形での開催としました。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございます。また、今回、お声をかけることができなかつたみなさま、この場を借りてお詫び申し上げます。

「できることもちよりワークショップ」とは、一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト（草P）が主催している活動のひとつで、地域のさまざまな分野で支援活動を展開している NPO、行政、企業、個人などの出会い、つながりの場をつくるワークショップです。このワークショップで生まれたネットワークを基盤として、地域の具体的な困りごとを解決するプロジェクトチームの立ち上げから、プロジェクトが地域に出て問題解決にチャレンジするところまでをサポートするという試みを企画・運営しているものです。

ダイバーシティとやまでは、2012年1月に愛知県で開催された「ふわりんクルージョンセッション」に宮田が参加し、こうしたセッションを富山でも実現したいとの想いから、まずは勉強会の形でスタートしたものです。

（ふわりんクルージョン紹介のページ）

（[http://grassroots.jpn.com/?page\\_id=65](http://grassroots.jpn.com/?page_id=65)）

今回は、草Pのカイパパこと鈴木淳さんを講師に迎え、16人の参加者によるワークショップと講義・質疑を開催しました。今回の勉強会の参加者は、経験豊富な支援活動の実践者の方たちで、ワークショップでは異様な盛り上がりを見せ、カイパパさんも驚愕される場面が多々ありました。「富山はスゴイ・・・」と。

質疑では、ネットワーク形成の難しさについて会場内で共有され、ワークショップによる手法も有効であるものの、その後、実際に具体化して機能していくまでにネットワーク化を進めること、また進んでいくことは、別のフェーズに移行していくことだとの認識も共有しました。こうした質疑の最後に、参加者のYさんが仰った一言が、参加者の心に深く深く突き刺さりました。みなさま、覚悟を決めてまいりましょう！

草Pのカイパパ、とても素晴らしいワークショップ&舞台裏話付きのご講演、本当にありがとうございました。



## 2. 「子育てに悩んでいる全ての方におくる『習慣術セミナー』」開催事業

【実施日】2013年3月6日

講師は、「誰でもできることを、誰にもできないくらい徹底的にやると奇跡が起きる!」、それを実践しているらっしゃるナニワのメンター、ナニメンこと吉井雅之さん。年間 3000人以上の人にセミナーを行い、そのセミナーを受けた人から考え方が変わった、そして生き方が変わった!と定評のあるナニメンさん。



平日の日中の開催、しかも、直前の告知だったにも関わらず、ナニメンさんのセミナーをぜひ受講したいというお母さん方が受講してくださいました。

今回は託児付きということで、可愛い1歳児の女の子のお母さんを始め、小学生のお母さん、中学生、高校生のお母さんと、それぞれの年代での悩みを持つ方が参加されました。

ナニメンさんは、子どものことを徹底的に信じきる親であることの大切さを伝えてくださいました。子育ては応援そのものだということ。一見どんなに不可能なことにも思っても、絶対に無理だと言ってはいけないこと。親はいろいろな経験値があるから、つい子どもの行動に口を挟みたくなってしまいます。そんなこと絶対に無理だと、子どもの夢泥棒になってしまう。でも、大事なのは応援する親だという覚悟なのです。

もし子どもが失敗したとしても、絶対に言うてはいけない言葉があります。それは、「だから言ったでしょ!」。そう言うてしまうとそれは本当に失敗になってしまう。どんな時でも子どもを信じて、絶対に応援するというスタンスをとってれば、そういう言葉は自ずと出なくなるものだと、力強くおっしゃってくださいました。「勉強しなさい」と言うてしまうのも、子どもを信じていないから。「勉強しなさい」というより、「あなたはできるよ。信じているよ」の方がはるかに子どもは勉強するようになるものだと。

また、何より夫婦仲が良くて、尊敬し合っていることが大切だとも伝えてくださいました。一番よくないのは、子どもたちの前で夫婦ケンカしたり、お互いの悪口を言い合ったりすること。お互いの悪口を子どもの前で言うている夫婦では、悪口を言わない一人親の足元にも及ばないと。

そして、手を出さずに待つことの大切さも教えていただきました。朝、忙しいとついつい親は何でもやってしまうけれど、そうすると、「あ、お母さんは何でもやってくれるんだ」、と脳にインプットされてしまう。そして、自分でやらなくなってしまうのだと。自立を促すことも親の大事な務めです。このため、親が自ら率先することは、挨拶、靴をそろえる、良い姿勢で座る。早起きの習慣をつけることも大事です。そう

すれば朝、時間がないからといって、親が手を出してしまうこともなくなるからです。

さらに、家庭で不足しているのは未来の話。例えば、行きたい学校が決まっているときは、その学校の前で写真を撮るだけでも有効です。未来のアルバムを作って、脳にその状態をインプットするのです。思えたことは実現するものです。

難しいのは、夢が実現する、と思うこと。(←ここ大事です)

無理なんじゃないかなあと思っていると無理になる。絶対できると信じ込めたら絶対できるのだと。「また、そんな～」と思われるかもしれませんが、実際にそうかどうかです。例として、ナニメンさんが指導されている全国トップクラスのジュニアスポーツ選手のご家庭でのお話をしてくださいました。その子は、誰よりも実力を持っているはずでしたが、なぜか大事な場面では失敗ばかりしてしまいます。そこで、ナニメンさんは、ご家庭での出力を徹底的に変えてもらったということです。

子どもに声かけするときは、

「大丈夫？」ではなく、

「今度の試合で何点とるの？(ワクワクな感じで)」

「今度こそ失敗しちゃだめよ」ではなく、

「信じているよ。あなたなら大丈夫(^)」



そうやって家庭での親の言葉かけを変えただけで、子どもたちは実力を十分に発揮できるようになるのだと。ナニメンさんは、弱小チームをトップレベルのチームに変えることもたくさん手がけていらっしゃいます。

そんな時に大事なものは、目標は高く設定すること。県で一番になりたいと思ったら、そのレベルの練習しかしない。これが、日本一、世界一になるんだと思えば、自ずと練習の質も変わってくるのだそうです。つまり、すべては自分たちの脳が決めているのです。

逆に、子どもたちのやる気を一瞬でなくさせる言葉があります。

「大変、難しい、できない、最悪、どうせ無理」

この5つは絶対に禁句とのこと。親がこの言葉は絶対に使わないと決め、そして子どものことを信じきると決意したら、きっと、子どもたちは最高の笑顔を見せてくれるようになるでしょう。そんな子どもたちの笑顔、それが親にとっては一番の宝物にちがいない。こうしたことを感じ、心が温かくなったセミナーでした。

もっとステキなお話もたくさんありましたが、それは、ぜひ今度、ナニメンさんのお話を直接お聞きになってみてください。感動の涙で、心がとっても軽やかになること間違いなしでしょう。

### 3. 「ワールド・カフェ「ちがいを活かす多文化共生」 in 『国際交流フェスタ in 海王丸パーク』」協力事業

【実施日】2012年10月6日

【主催】公益財団法人伏木富山港・海王丸財団(※)

【協力】NGO ダイバーシティとやま

(※) ワールド・カフェの主催はダイバーシティとやま

射水市にある海王丸パークには、海の貴婦人と呼ばれる帆船「海王丸」が、昭和5年に進水して以来、地球約50週の航海を経た現役中の姿そのまま公開されており、毎年さまざまな行事やイベントが開催されていますが、10月6日～8日に「国際交流フェスタ in 海王丸パーク」として、世界各地を航海してきた海王丸にふさわしいイベントが開催されました。

ダイバーシティとやまでは、10月6日の10時30分～13時に、「ちがいを活かす多文化共生」というテーマで、外国人と触れ合うワールド・カフェを開催しました。

たくさんの外国の方々にもご参加いただき、まさに、言葉や文化背景のちがいを活かす多文化共生が話し合われました。グループの中には、日本語が使われないグループもあり、互いを理解し合おうという積極的な会話も交わされていました。

当日はトルコ、ブラジル、イタリア、韓国、インド、インドネシア、スペイン、中国、日本料理の屋台も並び、他にもいろんな催しが満載。ダイバーシティを満喫できるイベントとなりました。



#### 4. 『ミンナ DE カオウヤ』プロジェクト」への参加協力事業

「ミンナDEカオウヤ」プロジェクトとは、被災エリアの授産品を日本全国で販売して、被災した障害者の収入・福祉事業所の経営を支える「参加型」プロジェクト（＝経済活動支援）です。「ミンナDEカオウヤ」プロジェクトの商品は、被災地の授産施設で作られた品物たちです。私たちが買うことで被災地の福祉施設の経営や障がい者の収入に結びつく、被災地に行かなくても出来る支援の形です。

ダイバーシティとやまでもこのプロジェクトの趣旨に賛同し、富山の LiTa club、高岡のひとのま、LiTa 小矢部、滑川の森本自動車に商品を置かせていただきました。

たくさんの方のご協力をいただき、ありがとうございました！



### Ⅲ. "ちがい"が光る事業

#### 1. 「とやまのてっぺんでダイバーシティを考える夏期大学」開催事業

【実施日】2012年9月16日、9月17日

【共催】はちどりBANK@とやま

「高い山に登ると、日常生活での困ったことなんて、すご〜く小さなことに思えるよね」と、ひよんな会話から企画が始まったこの夏期大学。これが想像以上の成果がありました。

<企画のねらい①>

##### 「富山県で一番標高の高い場所で考える」

物事は高い視点から俯瞰した方が、理解が進むことがよくあります。このため、肉體ごと物理的に高い場所に移動して、日常生活の営みを眺めてみました。呉羽丘陵の山影に二分される富山平野はもちろん、その向こうの氷見や能登半島まで、電球のひとつひとつが織りなす夜景を一望することができました。

参加者ひとりひとりの胸の中に去来するものがたくさんありました。

<企画のねらい②>

##### 「多様性を体感してみる」

多様性を体感するには、焦点を移動させることがポイントになります。焦点が移っていく時には時間がかかるものですが、登山を通じて、その時間を疑似的にも体験することができます。

大人になってみると、幼い時に拘っていた小さなちがいというものが、いかに些細なものであるか、振り返ってみるとよく理解できます。山頂から平野部を眺めてみると、いかに些細な出来事に毎日心を悩ませているのか、よく理解できます。

その一方で、ひとつひとつが輝き、全体が調和した美しさを創造していくためには、個々の多様性が必要不可欠であることが実感できます。

参加者ひとりひとりの笑顔の輝きに多様性を実感できました。

<企画のねらい③>

##### 「新月の夜に満点の星空を眺める」

人は光ばかりを求めがちです。栄光や美しさ、大きさや影響力など。光があるものにばかり目を奪われがちですが、果たして明るければ、それでいいのでしょうか。

満月の美しさは、花鳥風月さまざまな表現がありますが、新月の本当の美しさはなかなか体験できません。光がなければ輝くものが見えてくる。無数の小さな光が集まり、光の渦、川となる光の運行が見えてくる。

それぞれの固有の光があり、それぞれに素晴らしい存在であることを新月は教えてくれます。

新月は、そんな参加者ひとりひとりの心を照らしてくれました。



<企画を超えた成果①>

#### 「超ラッキーの連続」

自分が初めて立山に登ったの時に、先輩にこう言われました。「初めて登る立山が快晴だったのは、立山に好かれてる証拠だな」と。今回の参加者すべてが立山に好かれているのだと実感しました。

晴天はもちろん、上へ下へとガスや霞が乱高下する強風あり、ブロッケン現象あり、刻々と藍色に深まる夕闇あり、黄金色に輝く夕焼けあり、神々しい雲上の世界あり、急峻にそびえ立つ厳しい峰々あり、満点の星空と富山平野の夜景あり、茜さす東雲の萌え立つ朝日あり、そして雷鳥さんのご登場。これを超ラッキーの連続と言わずして、なんと呼びましょう。

<企画を超えた成果②>

#### 「スーパーナビゲーター上野氏」

今回の企画全体のコーディネートはもちろん、裏方、ガイド役、すべてにおいて、上野さんの尽力なくしては実現できませんでした。

出発前の準備段階でのアドバイスはもちろん、立山駅出発時から帰路に至るまでの名ガイド、室堂出発時には玉殿の湧水での水分補給のアナウンス、一の越山荘ではお味噌汁のサービス（参加者全員分の水を上野さんが担ぎ上げ、上野さんが持参したコップ、カップ、スプーンなどでの振る舞い）、高山病への細やかな気配り、なかなか聞くことができない山岳警備隊のお話、そして、私たち全員の心に残る数々の写真。

毎瞬毎瞬、私たちに常に素晴らしい瞬間を、わかりやすい解説、温かい言葉で私たちに届けてくださいました。

本当にありがとうございました。

<企画を超えた成果③>

#### 「ステキな参加者のみなさま」

今回は、参加者のおひとりおひとりと、言葉を交わすことができ、また触れ合う距離での夏期大学でしたので、本当に充実した時間を共にすることができました。

酷い残暑の続く中、汗を流し、心臓も破れんばかりの標高差を踏破し、大汝休憩所の温かな主人に迎えられ、雄山～大汝からの数々のステキなプレゼントを身に抱き、山小屋の中で温かなストーブの暖と美味しい食事、濱谷さんの優しいサンレレの音色と歌声に包まれました。おひとりおひとりの言葉は、音色とともに消えていってしまうものですが、参加者の心にしっかりと根付いたのではないかなと思っています。

ステキな参加者のみなさま、本当にありがとうございました。

## 2. 「ダイバーシティ・サポーター養成講座」開催事業

【実施日】2012年10月27日～11月25日

【共催】一般財団法人ダイバーシティ研究所

10月27日（土）から11月25日（日）にかけて、全4回で、「ダイバーシティ・サポーター養成講座」を開催しました。各講座とも充実した内容で、毎回、受講生のみならずとともに、新しい学びをいただきました。毎回、3時間～4時間の濃密な内容となり、以下は、ほんのエッセンスとなりますこと、ご容赦くださいませ。

### ○第1回（概論）「人口減少社会を迎え、人的多様性配慮型社会に求められる人材とは」

【講師】柴垣 禎(一般財団法人ダイバーシティ研究所 客員研究員)

柴垣さんからは、現在、人口変動社会をはじめ、人口構造上の産業の衰退や、うつや自殺者の増加など、日本が直面している課題は数多く、極めて深刻な未来像しか描けていないことから、マイナス面をプラス面へと価値転換を図る見方をし、発想を転換して、ちがいを優位性として捉える必要性があるとの話をいただきました。

こうしたちがいを優位性と捉え、ダイバーシティを推進する取組みの必要性は政府（経済産業省）や経済界の一部ではすでに提言されてきているが、女性躍進など一部のダイバーシティへの取組みが始まったばかりであり、今後、さらに面的な広がりのためには、ISO26000などの活用も必要とのことでした。確かに！

さらに、企業や障害福祉の現場での取組み事例を紹介し、「ダイバーシティは決して難しいものではなく、誰もがダイバーシティへの取り組みに参加することができる。企業であっても本業を通じてダイバーシティへ取組むことにより、従業員のモチベーションの向上につながっている」と結ばれました。

養成講座の後半は、ワークショップが開催され、参加者全員で様々な多様性であるダイバーシティを洗い出し、後続のワークショップのための意識共有を行いました。

### ○第2回（各論①）「障害福祉とソーシャルインクルージョン」

【講師】東 真盛(めひの野園うさか寮施設長)

#### （各論②）「外国人をめぐる諸制度と多文化共生」

【講師】山元 真弓(富山県国際・日本海政策課国際協力係長)

第2回は、めひの野園の東真盛うさか寮施設長から、障害福祉制度とソーシャルインクルージョンについて、富山県国際日本海政策課の山元真弓国際協力係長から、外国人をめぐる諸制度と多文化共生について、それぞれの分野の概論と現状について理解を深める講義がありました。

東さんからは、現在、日本政府は障害者権利条約批准に向けて、国内法の整備が進められているが、中でも、障害という考え方について、障害は人に起因するという医

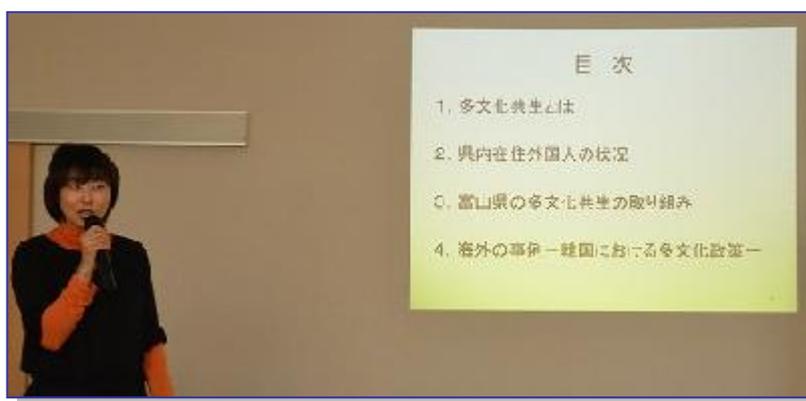
学モデルではなく、環境因子が障害を生む社会モデルの考え方を取り込んでいくことが大切な視点になるとのことだという話をいただきました。また、自閉症や発達障害の人は、他の人には見られない優れた点があくつもあり、歴史上の様々な人、現代に活躍する人にも発達障害の人が多くいるとのことでした。そして、これらの人が言うところでは、周囲の環境や人の理解があったからこそ、今の自分があるとのことでした。なるほど！

発達障害の特長の特徴として、周囲から見えにくいまたは、まったく見えないということがあつたため、周囲人の理解が必要になるとのことでした。そして、こうした様々な特長を持った人たちが住みやすい社会を創っていく、すなわちソーシャルインクルージョンを進めることが、これからの社会に求められる鍵となるだろうとのことでした。

引き続き、山元さんからは、日本の地域に住む外国人について、国内の労働力不足を補う形で増加してきており、富山県においても外国人は20代～40代の働き盛りの労働力人口の層が多く占めている現状にあるという話をいただきました。このため、外国籍の子どもも多く、日本語指導が必要な生徒も数多くいるとのことでした。そして、年を追って、中学生が占める割合も増加してきており、地域にとって、こうした子どもたちへの教育についても大きな課題があり、県の多文化共生の施策とひとつになっているとのこと。こうした在住外国人との共生が、将来の地域の活力の原動力になっていくとのことでした。なつとく！

また、韓国の多文化共生の現状が事例紹介としてあり、韓国は日本よりも多文化家族化が進展しており、それゆえに様々な課題が顕在化しているため、国家戦略として多文化共生を推進しているとのことでした。具体的な事例を通じて、韓国と日本との比較から見えてくる課題の違いに、これからの日本に求められる多文化共生の在り方も見えてくるようでした。

後半のワークショップは、グループワークにより、参加者が属する企業活動をダイバーシティ化し、グループ単位で発表を行いました。実社会をダイバーシティ化するという作業を通じて、さまざまな視点が提示されました。



### ○第3回（実践事例紹介）「ひとりひとりが輝ける組織づくりとは」

【講師】薄井 修司((株)ウエルネスサプライ代表取締役社長 代表取締役社長)

薄井さんからは、組織の構成員のひとりひとりが輝いていくためには、経営者が熱い想いを持っていること、そして、その想いを 100%伝えきる努力をしていくことが大切だという話をいただきました。「同じ人間はいないのだから、相手に 80%も伝わればいだろう」という思いをもって接していると、経営者の思いがお客様に届くまで、部下の人数分だけ「80%×80%×・・・」という計算式が続き、お客様に届く前に 25%ほどにも落ちてしまうとのこと。なんてこと・・・！

薄井さんは、阪神淡路大震災をはじめ、さまざまな困難に直面しますが、従来型の組織運営ではなく、お客様が施設を気持ちよく楽しみたいという気持ちと、運営スタッフがお客様へと喜びを届けたいという気持ちとをマッチングしていくためには、どういうやり方ができるのか？という視点で、一貫して組織運営を行います。

「社員のやる気を引き出す」

この言葉は、何十回も何百回も聞いたことがあるフレーズだと思います。しかし、薄井さんが実践してきた手法は、誰もが経験したことがあるにも関わらず、会社内では経験したことがないことを会社内に取り込み、会社が大家族化していくという手法でした。ひとりひとりバックボーンが異なる社員が、ひとつの家族のように想いを共有化していく。これこそダイバーシティの到達点のひとつといえるでしょう。

養成講座の後半のワークショップは、参加者が多様性に配慮した事業を起業化していくという課題に取り組み、グループ単位で発表を行いました。

短い時間にも関わらず、とても素晴らしいプレゼンでした。



○第4回（ダイバーシティとやま設立1周年記念フォーラム）

「ダイバーシティなくして地域社会の未来なし」

講師：田村 太郎（一般財団法人ダイバーシティ研究所 代表理事）

「見方を味方に世界を変える」

講師：南野 忠晴（大阪府立八尾北広報学校 家庭科教諭）

-----以下、「ちがいに気づく事業」に掲載-----

### 3. 「ISO26000 セミナー in とやま」開催事業

【実施日】2012年11月15日、11月24日

【共催】株式会社損害保険ジャパン／日本興亜損害保険株式会社／NPO 法人市民活動サポートセンター

ISO26000 とは何でしょうか？

国際規格として発行され、CSR とともに社会的ニーズが高まりつつある ISO26000。

しかしながら、現状ではまだまだ十分に普及しておらず、有効活用されているというには、ほど遠い現状です。

グローバル化が進展し、企業活動や市民の生活において、国境を超えた相互交流が強まるなか、気候変動、人口変動、生物多様性、貧困、人権といった1つの国や1つのセクターだけでは解決できない課題の解決に向け、企業が地域活動に参画していく必要性が高まっています。

こうした中、国際的なルールのひとつとして、組織の社会的責任（Social Responsibility:SR）に関する国際規格「ISO26000」が発行されました。

こうした状況を踏まえて、「ISO26000 とは何か」「ISO26000 に基づくステークホルダーとの合意形成とはどういうものか」ということを、みなさまとともに考えてみました。

今回は、株式会社損害保険ジャパン、日本興亜損害保険株式会社、NPO 法人市民活動サポートセンターとの協働事業として、2 回シリーズでの ISO26000 のセミナーを開催となりました。

また、今回のセミナーは、出血大サービスで参加費無料とし、企業と NPO とその協働のために、必要不可欠な視点を提示させていただきました。



#### ○第 1 回「ISO26000 の概要とポイント」～企業としてガイダンスをどう活用するか～

【講師】関 正雄(株式会社損害保険ジャパン 理事CSR統括部長)

#### ○第 2 回「ISO26000 時代の企業と NPO」

【講師】田村 太郎(一般財団法人ダイバーシティ研究所 代表理事)

## 4. ブログ「ダイバーシティとやまな日々」配信事業

富山県在住者を中心として、富山を盛り上げている多様な方々にインタビューし、ブログに掲載しました。多様性のある人々の生き立ちや経験、考え方に触れることで、読者が読者自身のちがいに気付き、自身の多様性から社会的な広がりを実感していくことが可能となります。

また、こうした取材・情報発信を通じて、富山の多様な人々をつなぎ、多様性が素地となる地域社会の構築へと貢献することができました。

(URL:<http://blog.canpan.info/diversityt/>)